

セカンドスクールに向けて その5 「白馬村の巻」

本校セカンドスクールの本拠地である白馬村は、長野県の北西部にあり、村の西側には標高 3000m 級の山々が聳える後立山連峰が控え、東側には標高 1000m 級の山々が連なる小谷（おたり）山地があり、村の中心となる部分は、南北に細長く伸びる白馬盆地に存在しています。南から北へは姫川という川が流れ、日本海に注いでいます。北アルプスの麓ということもあり、冬はスキー、夏は登山で人々が訪れ、1998 年の長野オリンピックでは、八方尾根スキー場がアルペンスキー（滑降・スーパー大回転）競技、白馬ジャンプ競技場がジャンプとノルディック複合・ジャンプ競技、スノーハープと呼ばれるクロスカントリースキー競技会場がクロスカントリースキー、ノルディック複合・クロスカントリーの会場として使用されました。



村の東西を山地に挟まれた白馬へアクセスするには、村の南北を貫いている道路と鉄道が主な手段となります。白馬村を南北に貫く国道 148 号線は、その昔、**千国街道**（ちくにかいどう）と呼ばれ、新潟県の糸魚川から長野県大町・安曇野を経て松本盆地の松本・塩尻に至る道でした。この千国街道はまた、「塩の道」とも呼ばれています。海産物を内陸部に運ぶために作られた「塩の道」は国内各地に存在していますが、ここ千国街道は江戸時代、



信濃の松本藩が日本海産の塩を運ばせるために拓かれた道であるといわれています。白馬村への主要道路は長らくこの道だけでしたが、1998 年の長野冬季五輪の際、長野市内のメイン会場や選手村から選手や観客を運ぶために、長野市内から大町を結ぶ県道 31 号長野大町線と、白馬村に至る県道 33 号白馬美麻線が、県道にもかかわらずアクセス道路として一級国道並みの

整備が行われ、「**オリンピック道路**」として活用されました。現在でも、長野駅と白馬駅の間には高速バスが頻繁に運行され、北陸新幹線を利用すれば東京から最短 2 時間半で（！）着くという利便性が確保されています。

 鉄道については、長野県中信地方の山都・**松本**と新潟県西端の日本海側の街・**糸魚川**を結ぶ **JR 大糸線**があり、県内のみならず新宿駅や名古屋駅からの直通列車も設定されています。白馬村には南神城・神城・飯森・白馬・信濃森上という 5 つの駅があり、地元住民の生活の足であるとともに、夏冬問わずに山岳リゾート拠点として機能しています。村の中心となる白馬駅は、住所が四ツ谷地区であったため、開通当初は信濃四ツ谷駅という名で開業し、昭和 43 年に白馬駅と改称しています。



長野県 HP より

冬はスキー、夏は登山の観光客が訪れ、避暑地として知られる白馬村。昭和 30 年代後半からのスキーブームによって村内のスキー場が整備され、その後のペンションブームも手伝って、一大スキーエリアとして発展してきましたが、90 年代以降は、バブル崩壊による不況で状況が変わり、村でも方策を講じる必要が生じました。その後のスキー低迷期から五輪による知名度上昇が、海外からの観光客が増え始め、「ハクババレー」は、日米両国企業による高級ホテル開設など、滞在型国際スキーリゾートとしての整備が進んだのです。さらに白馬村ではさまざまな方法で村を発展させようという取組が行われ、インバウンド需要が大きく増加しています。